

【自著紹介】 藤城孝輔『村上シネマ——村上春樹と映画アダプテーション』

(森話社 2024 年 12 月)



本書は、筆者が 2019 年から 2024 年にかけてとりくんだ村上春樹と映画についての研究にもとづく学術書である。『風の歌を聴け』（大森一樹監督、1981 年）から『ドライブ・マイ・カー』（濱口竜介監督、2021 年）までの映画アダプテーションに関する論文 10 編と、村上春樹の初期の映画評と『騎士団長殺し』（2017 年）の関係を模索した論文の計 11 編がメインの章を構成している。さらに、『めくらやなぎと眠る女』（ピエール・フォルデス監督、2022 年）などを論じた短めの文章 4 編を補章として付けくわえた。

本誌の編集主幹である小島基洋氏と拙著について話をしたとき、方法論についての話題になった。欧米における日本文学の研究手法と国内における研究手法とでは、あきらかな違いがあるというのが小島氏の見解だった。私はイギリスの大学院で映画学を学んだ身であるにもかかわらず、本書の研究手法、とりわけ新聞記事や公開時の映画評といった一次資料の参照には、日本的な方法論の特徴がみられるらしい。そんな思いもよらない指摘を受けて改めて本書の内容を見わたしてみると、本書の方法論が決して一貫したものではないことに思いあたった。それは 6 年間の研究プロセスとも関わる問題であるため、この場を借りて簡単に振り返ってみたい。

本書のなかで最初に書いたのは、第 10 章の『バーニング 劇場版』（イ・チャンドン監督、2018 年）の論文である。2018 年の年末に NHK で放映されていた 95 分版の『特集ドラマ バーニング』を見て、すぐにアジア映画研究学会（Asian Cinema Studies Society; ACSS）の大会むけに発表のプロポーザルを書き送った。このときは村上作品のアダプテーションを全作とりあげようなどという計画は夢にも思いうかばなかった。ただ、短縮版であれ作品を見て、不可視性というキーワードで料理できると直感したのだ。不可視性や音に関する理論で肉づけしたうえで、作品を韓国の同時代の歴史的コンテクストに位置づける作業を進めていった。

映画の分析を理論で下支えするアプローチは、留学中に学んだ映画学の授業で身につけたものである。イギリスでの映画学の授業は、教員による講義、ディスカッションを中心とするセミナー、そして上映で構成される。学生は映画を見たうえで、映画理論や学術書の抜粋からなるコース・リーダーを読み、セミナーで作品とリーダーの内容を関連づけて論じることが求められる。歴史的な文脈を重視する姿勢も、修士のころに読んだフレドリック・ジェイムソンの『政治的無

意識』にある「常に歴史化せよ」という主張から学んだものだ。そのため、第10章では英語圏の理論や先行研究が援用される。その反面、韓国語の資料を一切参照していないのが難点だ。

方法論的な変化を迎えるきっかけになったのが、2019年4月に京都大学で行われた村上春樹研究フォーラムへの参加である。シンガポールで開催されるACSSの大会を7月に控えていた私は、山根由美恵氏による『バーニング』についての講演が行われると知り、ネタかぶりの焦燥感を胸に抱えて参加を申し込んだ。フォーラムに出席していた顔ぶれで面識があったのは映画研究でつながりのあった伊藤弘了氏だけだったが、私は講演直後の山根氏にからみに行ってACSSで発表予定だった持論をぶちまけたうえに、厚かましくも打ちあげにまで居残った。発表の先を越された悔しさもなかったわけではないが、むしろ同じ作品に対するアプローチの違いにときめいたのが大きい。日本文学研究で培った山根氏の読みの精緻さには舌を巻くばかりで、映画の結末をめぐる多様な解釈の可能性はACSSの拙発表でも先行研究として紹介した。

山根氏が主宰する村上春樹とアダプテーション研究会に入れてもらい、さらに2022年から科研費基盤研究C「村上春樹文学アダプテーションに関する総合的研究―「世界文学」という視座から―」(22K00320)に研究分担者として参加したことは、私にとって貴重な切磋琢磨の機会になった。Zoomでほぼ毎月開催される研究会では、同じ研究対象を異なる視点から論じあうことがたびたびあった。第1章のもととなった鈴木清順のネタでは内田康氏と重なる部分があり、第2章の『風の歌を聴け』では内田、山根両氏とほぼ同時期に研究にとりくむことになった。そんななかで同時代の史料、とりわけ作者自身の発言をブルドーザーのように徹底的に掘りおこす両氏の手法から学ぶところは大きかった。

研究会に入ってからほどなくして書いた第8章の『アコースティック』(ユ・サンホン監督、2010年)に関する論文は、『バーニング 劇場版』の論文からの方法論的な変化が見受けられる。作品分析をK-popと男性性をめぐる英語の理論書の援用で支えている点はまだ変わらないものの、引用される文献は学術的な先行研究にとどまらず、DVD収録の出演者へのインタビューや韓国の映画サイトのブログ記事、『an an』などの一般むけ雑誌のグラビア記事といった具合に多様化している。また、韓国語の勉強が少し進んだこともあり、韓国語の文献も若干参照されている。研究会で学んだブルドーザー方式を使いこなそうと、自分なりにあがいた痕跡が散見される。村上文学の映画化作品を網羅する単著の構想が浮かんできたのも、この時期だった。

個々の作品を分析した論文をほぼ通時的に並べて一冊にまとめた本書には、その構成に起因する弱点も存在する。特に気になるのは、作品研究からアダプテーション全般をめぐる理論を導きだす視点の欠如である。映画学者のアーロン・ジェロー氏であれば、日本の映画研究における「セオリー・コンプレックス」とでも呼ぶだろうか。本書は各章でとりあげた個々のアダプテーション作品を研究したい方々にとってのたたき台にはなるだろうが、村上春樹作品に限らないアダプテーション研究全体に対して本書が何がしかの貢献ができたかといえは疑問が残る。映像作品や文学作品といった個別のテキストに対する愛着はおそらく今後も捨てることはできないだろうが、テキスト分析を普遍的な理論に昇華させる方法論をいつか身につけたいものだ。

【藤城孝輔(映画研究)】